

ワシントン情報、裏 Version

2005年9月12日

竹中 正治

「アメリカ版『電車男』:The 40-Year Old Virgin」



【不作の夏】

今年の夏の不作はひどいものである。凶作と言ってもいい。農作物の話ではない。新作アメリカ映画のことである。“Kingdom of Heaven”, “Revenge of the Sith”, “War of the Worlds”, そしてエッセイは書かなかったが、“Batman Begins”と見応えのある新作が春から続き、楽しんでいたが、夏前からはジャンクな作品がほとんどである。今年の夏の全米映画シアターの興行収益が前年比でマイナスとなったそうだが、無理からぬことだ。米国映画がダメなら、日本のアニメを見ましようかということで、「ハウルの動く城」を夏休みで当地に戻って来ていた家族と見に行った。ところが「宮崎さん、一体どうしちゃったの……」と絶句するような出来映えだった

【ヘンテコな映画のヒット】

コメディ映画“The 40-Year Old Virgin”は、通常だったら私は絶対に見に行かないタイプの映画である。ヤフーの映画欄を見ると、「家電スーパーに務める主人公アンディーは平凡だが、不自由のない居心地の良い生活をしていた。ただし一点を除いて……。彼は40歳にもなるのに、生涯でまだ一度も女性と『関係』を持ったことがない。つまりSEXをしたことがなかった。そんな彼の不遇を救おうと、同僚達は……。」

ヤフー映画欄のこのイントロを読んだだけで、私は「うなー」という印象を受けて、自分が見る映画ではないと片付けた。ところがこのヘンテコな映画、封切りと同時にヤフー映画欄のトップにランクし、驚くことに何週間経ってもランクが落ちず、大変な人気である。映画ひでりに苦しんだあげくに、私はどう思い腰を上げて、この映画を見に行った。封切りから数週間も経つのに、土曜日夜のこの映画の上映ルームは大入りだった。

主人公のアンディーは別にルックスが悪いわけではない。職場の同僚よりハンサムなくらいである。女性に関心がないわけではない。若い頃から異性関係には相応の努力をしたのだが、なぜか実らなかった。ただしアンディーはアニメ、映画の「おたく」で、ひとりで暮らすアパートにはスパイダーマンやGIジョーなどキャラクター・グッズが博物館のように大切に展示、保管されている。PCゲームも大好きで、大型スクリーンのTVと椅子丸ごとが操作レバーとなっているリモコンでゲームを楽しむ。自分が40歳にしてVirginであることは秘密である。同僚達の猥談にも自分が「経験者」であるふりをして無理に合わせる。しかし同僚の猥談とは微妙に噛みあわないギクシャクとした反応から、とうとう「おまえ、もしかして、一度もやったことないのとちやうか!？」とばれてしまう。

同僚にからかわれ、「俺はもうこんな職場やめるぞ！」という展開になる。しかし、気の毒に思った同僚達は一転、彼の女性関係をなんとか成就させようと様々な「工作」を仕掛ける。この間のドタバタは結構笑える。同僚に誘われてバーでのシングルズ・パーティーにも参加する。そこで知り合った女性はちょっと良さげに見えたが、酒乱だった。彼女の運転する車で一緒に家に向うが、酩酊した運転で命からがらの思いをした挙句に、彼女の嘔吐を顔に浴びてしまう、などなど。そうこうする内に、偶然店に来た感じの良い女性から「よかったら電話してね」と電話番号をもらい、ようやくアンディーにもチャンス到来！とストーリーが展開する。

【「おたく」と「負け犬」】

「おたく」あるいは「おたく族」の出現は日本だけのことではない。アメリカにも「おたく」はいる。主人公のアンディーは典型的なアメリカ版「おたく」である。「おたく」という言葉は、今では意味が拡散、多様化し、「マニア」とほぼ同様の使われ方がされる一方で、「自宅にこもりがちで、PCゲームや漫画、アニメ、映画ビデオに没頭しているネクラな人」というネガティブなイメージで語られることも多い。しかし元来「おたく」という言葉は、アニメ・ファンが相互に二人称で「おたくは....」と話すことから80年代に産み出されたそうである¹。つまり「アニメ・マニア」というのが「おたく」のオリジナルな語義である。ところが、不思議なことにこの言葉は様々な社会文化的な意味合いを吸着し、「おたく論」を巡って様々な本が出版されるほどに意味が膨れ上がってしまった²。

本来のおたく族には心外であろうが、「おたく」に付着したネガティブ・イメージのひとつが、「普通『期待される』年齢相応の社会的な関係、あるいはその一部を構築出来ずにいる自己閉鎖性」である。「学校を卒業してもきちんとした仕事がない」、「30歳過ぎても結婚していない」、本来こうしたことは「おたく」とは関係がなく、かつて心理学者の小此木啓吾が「モラトリアム人間」として提唱した範疇に属する問題である。ただ、こうしたモラトリアム人間の中にアニメの愛好家が比較的多く存在しているために「おたく」という言葉は「モラトリアム人間」という意味まで吸着するようになってしまったのだろう。

うかつにこのようなことを言うと同カテゴリーの方々の逆鱗に触れるかもしれないが、30歳代、未婚の女性を震撼させた「負け犬」概念も、私には「モラトリアム人間」の範疇に思える。彼女達は多くの場合「きちんとした職業」に就いており、高いキャリアの方もいる。しかし「結婚、家庭」というもうひとつの「期待される社会的関係」の構築に成功していない。彼女達が「結婚、家庭」を望んでいないわけではない。多くの場合、望んでいるにもかかわらず、なぜか実現できないでいる。

【「電車男」との類似性】

そう考えるとこの映画の主人公アンディーを「負け犬、男性 Version」と見ることもできる。この映画と奇妙な類似を感じさせる小説、ドラマが日本で話題だ。「電車男」である。わたしは小説も映画も見っていないので、詳しくはわからないが、「彼女いない暦」=年齢の22歳のネクラな「おたく」青年が主人公で、彼は電車の中でふと係わった美しい女性を好きになる。しかしネクラな彼は悶々とするだけで、彼女にアプローチできない。その思いをブログに書き始めると、彼を励ますネット仲間の輪が広がる。ネット仲間に励まされながら、彼は彼女へのアプローチを始める.....」というのがストーリーだ。これは実

¹ 「おたく」の定義については以下サイトご参照。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%8A%E3%81%9F%E3%81%8F>

² 「おたく論」を深めたい方は「戦闘美少女の精神分析」斎藤環、太田出版、ご参照。

話だそうで、彼のブログが話題となり、小説となり、とうとう映画化され、今年大変なヒットになっていると言う。

22歳と40歳の違いを除くと、日米二つの映画の強い類似性とヒットの同時性にちょっと驚かざるを得ない。当然のことであるが、TVドラマでも映画でも特定のストーリーがヒットする場合、幾通りかのパターンがある。よくあるのは、ストーリーや登場人物の設定と同じ、あるいは近似した状況がその社会でかなりの広がりをもって発生し、「そうそう、俺の従兄弟にもこういう奴がいてさ～、なんとかならないかな～」という具合に視聴者のシンパシーを呼び起こすパターンである。

子供から青年を経て「一人前の大人」になる過程で、古今東西、「結婚」と「就業」は2大ハードルである。ハードルだから、クリアするには相応のリスクと努力が要る。しかも、特定のハードルを飛び越えることが(=特定の職業に就く、あるいは特定の相手と結婚する)ことが本当に自分にとってより幸せな結果をもたらすかどうか定かではない。しかし、伝統的な社会では双方ともに本人の選択肢は限られ、多くの場合、周囲との関係で勝手に用意されてしまう。一方、現代においては双方とも自分の意思で選択しなければならない。しかも社会全般が経済的な豊かさを飛躍的に増していることで、フリーターをしてもとりあえず食うに困ることもない。こうした環境変化の結果、2大ハードルの片方、あるいは双方をクリアすることを延期し続ける人間が男女ともに多少増えるのは、ある意味では必然的なことかもしれない。それは自由の副産物なのだ。

【結婚相手の選び方】

私が大学を卒業して就職した最初の職場で、結婚運に悩む20歳代後半の未婚OLと次のような会話を交わしたことがある。

彼女:「私だって幾度かはお見合いしたのよ。でも判らないの。どうやって自分が一生暮らす相手がこの人で良いということが判るの? 結婚する人達はどうやってそれが判るの? 私は判らなくて今まで来ちゃったのよ。」

私:「なに言ってんだよ。お見合いして、どうしてもこの人では嫌だという決定的な点が相手になければ、『よろしくお願ひします』って言って承諾しちゃえば良いだけのことだよ。まさか『運命の人』との遭遇なんて期待しているじゃないでしょうね。多少の例外を除くと、そんなのは小説や映画の中の話なんだからね。そんなことにこだわっていると永遠に結婚できないよ。」

彼女:「え～!? そうなの、普通の人はそうやって結婚して行くの!? 竹中さん、あなたもそうやって結婚決めるの?」

私:「え? ボク? ボクは〇〇さんとは立場がちょっと違うじゃない。」

こう言い放った当時22歳の私は、この後、周囲の女性陣(みな年上)から集中砲火を浴びた。若さ故の傲慢さだとお許し頂きたい。自由で豊かな社会でも、まことに人間の悩みは減らないものである。



以上